

## 『第21回日本柔道整復接骨医学会学術大会』盛大に開催

齊藤豪会員が発表！ ー学術部のイケイケ日記 Part 4ー

今年もやってきました、日本柔道整復接骨医学会学術大会。今年は、11月24日（土）・25日（日）の両日、福岡国際会議場で開催されました。福岡どころか九州のどの県にも行ったことがないので、もう一年前からワクワク、ウキウキ状態（特に、妻や子供たち）で、この日が来るのを、今や遅しと待っていました。

それでは、お届けします！好評シリーズ（毎回自分で勝手に思い込んでいます）独断と偏見と少しエビデンス？を加えた学術部のイケイケ日記第4弾です。

尚、本大会においては、著作権保護のため、全ての録画・録音・撮影が厳禁となっており、小生の殴り書きのメモとおぼろげな記憶を頼りに作成したものであることを予めお断りしておきます。間違いがありましたらご容赦ください。

### 【大会前日】

午前5時に起床し、妻と手分けして洗濯や掃除を手際よく済ませ、身支度をする。いつもの光景である愛猫ソラの見送りを受け、車に乗り込む。芦原温泉駅の駐車場に、余裕を持って到着。待合室で、コーヒーを飲みながら発車時間を待つ。8時54分発サンダーバード12号に乗車し、新大阪で下車。新幹線のぞみ155号に乗り継ぎ、新横浜駅から乗車した子供たちと合流。久しぶりの再会に話が弾み、あっという間に博多駅に午後1時53分に到着。特急かもめ95号に乗車し、長崎駅に午後4時24分に到着。タクシーで先ず向かったのは、大浦天主堂。ここは、日本最古のゴシック様式の教会で国宝にも指定されている。厳かな雰囲気の中でお祈りを済ますと、徒歩で本日お目当てのグラバー園に向かう。開園時間が午後6時までなので、ゆっくり散策ができなかったが、夕闇の中でライトに照らされた園は実に見応えがある。特に、グラバー邸がある小高い丘から見下ろす長崎港の景観は素晴らしい。妻は、「ここで、福山雅治が紅白歌合戦で歌っていたのよねえ。」とウツトリしていたが、確かにこれだけ見事にライトアップされた庭園と邸宅をバックにして歌う福山雅治は、イケメンだけにより映えるのも当然である。それに比べ、自分は？？？

考えるまでもない、妻に聞くだけ無駄というものである（笑）。誰もいなくなった園を後にし、異国情緒溢れるオランダ坂を歩き、やっとのことで中華街に到着し、遅めの夕食を摂る。明日の本番に備えて英気を養うために、イチ、ニイ、サン4人で乾杯ダアー！子供たちは、この時とばかりと、食べる事食べる事！妻と口あんぐりである。よほど、日頃から薄給で節約しているのだろう。今は辛抱だ、ガンバレヨ！

食後は、タクシーで稲佐山山頂展望台に向かう。曇りがかかっていて、残念ながら1000万ドルの夜景とまでとはいかなかったが、聞きしに勝る見事な夜景である。100万ドルはあるだろうなあ（笑）

これで、本日の予定は全て終了。時刻は、もう10時を過ぎている。疲れた足を引

きずりながら、タクシーに乗り込みホテルに直行。チェックインを済ませ、部屋に入るなりシャワーを浴び、皆でバタンキューである。

### 【大会初日】

朝 6時に起床し、身支度を済ませ朝食の時間を待つ。1階レストランで、急いで朝食を摂り、タクシーで坂本龍馬像がある風頭（かざがしら）公園に向かう。早朝にもかかわらず、観光客が多いのには驚く。記念撮影をした後、近くの亀山社中資料館を見学する。長崎に来たからには、他の坂本龍馬ゆかりのスポットも観たいが、なにせ時間がないので、近くの龍馬のブーツだけを見学する。それにしても、ブーツがやけにデカイなあ〜。長崎駅に向かう途中、出島に少し寄り、ここで家族と別れる。ああもう時間がない！タクシーに乗るまでもない距離と判断し、駅に全速力で向かう。もう、気持ちはウサインボルトか野口みずき、はたまたQちゃんかである。しかし、考えが甘かった。悲しいかな足が前に出ない！何とか博多駅行の特急かもめに飛び乗れることができたのはいいが、もう息が上がりゼイゼイ状態である。しばらくノンアルコール（ウーロン茶なのが残念）で喉を潤し、落ち着かせることにする。博多駅までの2時間余り、学会誌抄録集をチェックする。今回は、いろいろと忙しかったので、事前のチェックがまったくできず、行き当たりばったりである。結局、何を聴くか迷っているうちに博多駅に到着。急いでタクシーに乗り込み、いざ決戦の場である福岡国際会議場に向かう。会場は、大相撲九州場所が行われている（11月25日が千秋楽）福岡国際センターの隣である。色とりどりの関取の幟が立っているので、いやがうえでも目立つ。ちょっぴり覗いてみたい衝動に駆られるも、「勉強だ」と自分に言い聞かせ、会場に入る。会場入り口で、偶然石川県の木山会長や塩谷副会長にお会いしたので、過日本県主管で開催された北信越ブロック理事会の御礼を述べ、受付をするためエスカレーターで2階に上がる。午前の部（11時開始）がほとんど終わりに近づいていたので、バイオメカニクスの分科委員会フォーラムがある5階のC会場に入り、午後の部（1時開始）に備えることにする。今回のフォーラムでは、高齢者の筋力トレーニングに焦点を当てていた。「介護予防筋力トレーニングと体力測定項目との関連性について」では、器具などのトレーニング方法が身体機能（歩行速度やバランス能力等）にどうかかわっているかを検証していた。その結果、単一の個々の機能に応じて運動処方が必要であると結論づけていた。至極当然の結果であろう。どの器具で筋力トレーニングをしても、必ず身体機能が向上するとは限らないことを実証したといえる。また、その他のトレーニングとして、現在行っているゲイトサイクル&固有感覚のトレーニングを紹介していた。高齢者は、ヒールコンタクトができずどうしても立脚中期が長くなりがちである。正しいゲイトサイクルと、関節の位置を的確に把握すること（固有感覚）が必要ということで、特殊なマット素材を使用した歩行指導を紹介していたのが大変参考になった。「高齢者に対する自体重負荷を用いたトレーニングの効果」では、発揮できる筋力が強いほど日常生活遂行能力が上がること、トレーニングにおける過負荷の原則として、トレーニング効果があるのは、最

大筋力の20～30%を超えること、筋力増加に伴い一面積に対する負荷強度は下がるので、6カ月を経過したらマシンでのトレーニングも必要であることなどをデータをもとに説明していたので大変解りやすかった。また、膝伸展筋力が強い人ほど認知機能が良いとのデータも紹介していたのだが、どの程度の認知レベルにトレーニングの効果があるのか定かでないことが疑問に残った。今後の検証が必要であろう。次に、実践スポーツ医科学セミナーがある5階B会場に入る。ここでは、腰痛を例に、スポーツと運動障害の検討をしていた。腰痛を診るにあたって重要なのは、どのような動作や姿勢で痛みが出るのかを機能解剖学的見地からしっかり把握すること、一部のみではなく複数の部位を本来の動作に参加させることによって障害部位への負担を減らすこと、具体的には股関節をみるのが大事で、腰椎・骨盤リズムを正常に戻すことだとのことである。

要するに、機能解剖をしっかりと理解した上で、腰痛の原因を全体の動きの中でとらえ、腰椎の運動に係るすべての部位が本来の正常なリズムに戻すことが重要ということである。わかっちゃいるが、これがなかなか難しい。

途中でB会場を出て、ちょっとシンポジウムが気になったので、3階のA会場に入る。実践スポーツセミナーと同時間帯で行っているため、途中からの聴講となったが、ちょうど宮崎県柔道整復師会の今村時雄会長が「柔道整復に秘められた魅力」と題して話しをされていた。その中で、印象に残った言葉は、柔道整復師は“トランスサイエンス”を行うべきである。トランスサイエンスとは、科学と社会とを包括して総合的に考える概念で、柔道整復術という日本古来の独自性を保ちながら、エビデンスたる証拠を集めることが、これからの柔道整復師に求められるというのである。次に、熊本県柔道整復師会の松村圭一郎会長が、「柔道整復と日本柔道整復接骨医学会の役割およびあり方について」と題して話をされた。まず、柔道整復は医科とは異なるものであることを指摘した上で、接骨医学会の役割とあり方としては、柔道整復師が次のステップに夢を持てるような、知的好奇心を持てるような、積極的に参加できるような、そんな学会にすることが重要であると強調されていた。やはり、松村会長も今村会長同様、柔道整復師の独自性を保つことが先ずは大事だということである。

最後に、座長の筑波大学名誉教授の目崎登先生が、今後の柔道整復師と接骨医学会のあり方として、1、卒後・生涯教育の充実 2、会員数の増加 3、学術集会の充実 4、学会誌の質の向上 であるとまとめられていた。特に、会員数の増加が課題で、今回発表された今村・松村両会長の県も、学会の加入率が36%と33%で、あまり高率とは言えない。これは、両県だけではなく、一部の都道府県を除いては、どの県でも同様であろう。実に悩ましい問題である。ちなみに、本県の加入率は、恥ずかしながら両県にははるか及ばず、12%ほどである。担当部長として責任を感じる。

次に、バイオメカニクスと固定法の一般発表を聴くためにG会場に入る。この中で、特に興味を引いたのは、バイオメカニクスの発表で、「月経痛の有無が骨盤周囲筋力と骨盤傾斜角に及ぼす影響」である。女性会員ならでは視点のテーマであり、非常に勉強になった。筋力は、月経期では梨状筋、腸腰筋、中殿筋、排卵期では梨状筋、腸

腰筋に有意差が認められ、腸腰筋力が強く、骨盤前傾が強い方が月経痛が強いとのことである。仙骨の動きも含めて、今後の更なる研究を期待したい。

発表を聴いている途中、何気なしに他の抄録を眺めていると、本会会員の齊藤豪会員（和利先生のご子息）の名前を発見する。発表会場は、スポーツ外傷・障害の一般発表のC会場で、なんと同時間帯である。演題は「柔道整復師による前十字靭帯損傷、競技復帰に向け保存療法選択のリハビリトレーニングと対応」となっている。しかし、時既に遅しである。まったくもって不覚である。事前に聞いていればなんて言い訳に過ぎない。事前に入念に抄録をチェックしていなかった小生が悪いのである。齊藤先生には、誠に申し訳ないことをしてしまった。会場でお会いした時にお詫びすることにしよう。抄録によれば、高校3年生の女子バレー選手で手術対象であったが、現役を続けたいという本人の気持ちを尊重し、医接連携のもと保存療法をし、良好な結果を得たとのことである。キーワードは、外転外旋筋への神経トレーニング、競技特異的運動動作の改善となっている。具体的な方法を聴けなかったのが残念である。ぜひ、3月の県学術研究発表会で発表してほしいものである。

これで、初日の日程は終了。時刻は午後6時30分である。既に外は暗闇である。急ぎ、会場前のタクシー乗り場に向かうが、長蛇の列である。しばらく、並んで待つが、いっこうにタクシーが来ない。諦めて、市バスで家族が待つホテルに向かう。有名な中洲の屋台を見学した後、日本料理店に入り、鍋を囲み今日一日の出来事を話す。妻と子供たちは、出島の後、大宰府天満宮、平和公園、平和祈念館、浦上天主堂等を観て回ったらしく、楽しく話す家族にチョッピリ羨ましさを覚える。まあ、菅原道真の孤独を思えば、家族と一緒に過ごせる幸せに感謝しなければならない。

## 【大会二日目】

二日目は、開始時間が9時ということで、ホテルでゆっくり過ごす。朝食を済ませ、8時30分にホテルをチェックアウトする。博多駅で、家族と別れ、国際会議場へタクシーで向かう。先ずは、総会があるA会場に入る。全ての議案が全会一致で承認され、いよいよ来年の接骨学会会場の報告である。来年は、11月23日・24日、東京有明医療大学で開催とのこと。やはり東京かあ〜。予想はしていたが、妻たちは落胆するだろうなあ……。取りあえず、妻にメールすると、「残念だが、前向きに行先を考えるわ。」との返事である。さすが、アクティブである。そのまま、A会場で、大会会長講演を聴くことにする。

講師は、福岡大学医学部病理学教室教授の竹下盛重先生で、演題は「身近で遭遇するウィルス感染症、特に九州地区に群発するHTLV1感染症の話」である。講演冒頭に、地元福岡県出身の作家であり精神科医の帯木蓬生氏の最新作「日御子」を紹介されたのには驚いた。先生は、大の帯木ファンだそうで、邪馬台国の九州説を支持されているとのことである。小生も、先生には遥かに及ばないが、帯木氏の作品を何冊か読んでいる。社会の問題を医師ならではの視点で書かれている作品が多く、好きな作家の一人である。残念ながら「日御子」は買っただけの積読状態である。早速、帰っ

たら読もうっと！

さて、肝心要の講演内容であるが、お話によると、人T細胞白血病ウィルス（HTLV 1）が引き起こす成人T細胞白血病／リンパ腫（ATL／L）は、HTLV 1に感染したCD4陽性T細胞が腫瘍化したもので、40年～50年経って発症し免疫不全を引き起こし、死亡するという重篤な疾患だとのことである。現在120万人の感染者がおり、日本では九州、沖縄地区に多く、世界ではカリブ海やアフリカ、ニューギニアに多いという。なぜか、モンゴル、韓国、中国には見られないとのことである。原因は、母乳による母子感染であり、男性から女性への感染も増えているという。HTLV 1は、マルコポーロやフランシスコザビエルと一緒に南蛮船に乗ってきた猿から感染したという、南蛮船経路説もあるとのことであるから興味深い。2007年には、HTLV 1感染者が関東で増加し社会問題化となってきたのに伴い、厚労省は2010年によく全国で妊産婦のHTLV 1検査を推奨したとのことである。全てにおいて国は遅すぎる。起きてからでは遅いのに！最後に、先生は本ウィルスの感染原因は、ザビエルではなく、民族の移動に伴うものであると結論づけられていた。個人的には、猿も捨てがたいのだが……。A会場を出ようとして出口に向かおうとすると、大阪の従兄が手を振っていた。（やっと会えたねえ）やはり家族と共に来たらしく、昨日は平戸からの移動とのこと。家族サービスお疲れさまです。従兄と別れ、B会場に入る。ここでは、橈骨遠位端部骨折をテーマにした一般発表を行っていた。コーレス骨折は、柔道整復師がよく遭遇する骨折であるから、復習の意味でよく勉強しておこう。

中でも興味を引いたのは、「C o l l e s 骨折に対して母指のみフィンガートラップを用いた整復・固定法」である。この方法は、従来の徒手整復法である牽引直圧法に比べ、患者さんに与える疼痛が軽減でき、整復位を保持した状態での外固定が可能であるとのこと。また、熟練度に関係なく、一定した持続牽引と安定した整復固定ができるのが利点だそうである。しかし、どの程度の骨折までが適応範囲なのかが疑問に残る。どう考えても、中程度か……。

会場を出ようとしたら、齊藤和利先生をお見かけしたので、早速昨日の失礼をお詫びする。

このまま、B会場でランチョンセミナーを聴こうと思ったが、弁当の引換券が手に入らなかったため、1階レストランで昼食を摂り、再びB会場に入る。

話は佳境に入っており、今後の整骨院・接骨院は、介護保険関連施設、特にリハビリテーションに特化したデイサービスを勧めるとしきりに強調していた。業者によるプレゼンなので、自己ピーアールに余念がないといった印象は拭えないが、今後の経営を考えたら選択肢の一つになるであろう。会場が立錐の余地もないほど埋め尽くされていたのが、それを如実に物語っている。会場を出ると、富山県の小倉学術部長にお会いする。先生も、ランチョンセミナーをお聴きしていたそうである。来年の北信越学術大会福井大会のお話を少しさせていただき、お別れをする。入れ違いに、偶然東谷先生に会う。昨日会えなかったのが、来ていないのかと思っていたらしい。す

みません、ご心配いただいて！確かに、例年なら、初日に必ず会っていたなあ～。

二日目もいよいよ後半戦、午後の部である。A会場の信原克哉先生の特別講演やG会場の実践スポーツ医科学セミナーファンクショナル体幹トレーニングも気になるが、日整学術部の酒井重数先生の教育研修研究会セミナーも見逃せないなので、迷った末に同セミナーがあるB会場に入る。ふと前を見ると、富山県の小倉学術部長が最前列に座られている。さすが抜け目がない。演題は、「柔道整復師が対象とする、柔整捻挫、軟部組織の捉え方ー軟部組織痛のメカニズムと柔整対象疾患としての整合性についてー」である。ご存じのように、酒井先生は日整学術部員にして、富山大学寄附講座研究員でもある。先ず、富山大学寄附講座での研究活動を報告された後、柔道整復師が現在置かれている社会的地位や評価を踏まえた上で、柔道整復師の対象疾患や今後の柔道整復師のあり方について熱弁をふるっておられた。本寄附講座は、柔道整復術、特に筋肉や関節などから発生する痛みの発症メカニズムの解明および痛みを発症している部分へ施す手技療法や電気治療、温熱・寒冷刺激、いわゆる柔道整復後療法により痛みが軽減するメカニズムの解明を目標にしているとのこと。既に、マウスを使った動物の遅発性筋肉痛モデルにおいては、徒手療法は効果的であることが証明されたとのことであるから、更なる研究を期待したい。特に、耳目を引いたのは、筋・腱など軟部組織損傷の臨床的特徴は“痛み”であると捉え、“柔道整復師が対象とする範囲（療養費の支給対象）を拡大し、骨・関節・筋肉等運動器系の疼痛については算定しても差し支えないこと”の文言を追加するべきだと、かなり踏み込んだ発言をされていたことである。ちなみに、現行では、「療養費の支給対象となる負傷は、急性又は亜急性の外傷性の骨折、脱臼、打撲及び捻挫であり、内科的原因による疾患は含まれないこと。なお、急性又は亜急性の介達外力による筋、腱の断裂（いわゆる肉ばなれをいい、挫傷を伴う場合もある。）については、第5の3の（5）により算定して差し支えないこと。」（柔道整復療養費の手引きP23参照）としか記されていない。実際に、骨折や脱臼を扱う件数が減っている中で、いかに業務拡大ができるかは我々にとっては死活問題である。先生の提言は、論議を呼びそうだが、傾聴に値する。ハードルは高いがぜひ実現できるよう、業界全体が一丸となって取り組むべきである。最後に、まとめとして、1、大学評価・学位授与機構に柔道整復学区分新設を申請する 2、評価されるためには、学位を取得する 3、国民の信頼と期待に応えるために、質の確保が必要 それには自ら努力することなどをあげて締めくくっておられた。1時間30分の講演時間があっという間に感じられるほど、有意義なセミナーであった。最後の特別講演も聴きたかったが、帰りの新幹線の時間も迫っていたため、早めに会場を後にする。時間は既に午後3時を過ぎている。慌てて会議場玄関前のタクシー乗り場に急ぐ。早めに会場を出たためか、昨夜とは打って変わって、即タクシーに乗車できた。博多駅に着くなり、ダッシュでキオスクに飛び込み、お土産を買う。同じ売り場で、バッタリ石川県の堂本総務部長にお会いする。お互い笑いながら挨拶を済ます。（先生も同じですねえ～。家族には忘れずにお土産を！）

買い物を済ませ、改札口を通り新幹線乗り場に駆け足で向かう。なんとかギリギリ

で午後3時44分発のぞみ46号に乗車。次の小倉駅で、妻と子供たちも走って乗り込んでくる。かなり強行軍だったのか、既に息が上がっている。これで、家族全員集合である。聞けば、壇ノ浦まで足を延ばしたらしい。今大河ドラマで「平清盛」が放映されているので、二位尼（時子）と孫である安徳天皇が入水し平家滅亡となった地を、この目でぜひ見たいと思ったらしい。見たかったなあ～。それにしても、長崎から門司までとは、かなりの距離を移動したなあ后感心する。「今ぞ知る みもすそ川の 御ながれ 波の下にも みやこありとは」と二位尼が辞世の歌を詠んだが、いったいどのような心境だったのだろうか、極楽浄土の都に何を思ったのだろうかなどと考えを巡らしているうちに、妻や子供たちは、疲れと満足感からかもう寝息をたてている。羨ましい気持ちもするが、少しだけプライベートタイムを楽しむことができたし、今年も家族サービスができたし、そして何よりも勉強もしっかり？できたので、良しとするか。

ただ、残念なのは、毎年思うことだが、本県からの参加者が少ないことである。今回は、遠方ということもあり、会員は小生も含めて4名であった。

来年は東京での開催なので、日程の調整をしていただき、できるだけ多くの参加をお願いしたいものである。家族サービスも兼ねて、ぜひ検討していただきたい。

新大阪で子供たちと別れ、サンダーバードに乗り継ぎ、午後10時頃に無事我が家に到着。子供たちからも、無事帰宅できたとのメールが相次いであったので、安心して床に就く。(完)

(文責 学術部長 森瀬 則昭)